

支配からの離脱

— 失われた求心力 —

堀 黎 美*

“Disengagement from Domination” (Part 4)

— Lost Centripetal Force —

Reimi HORI

Under the liberation policy, Chinese economy has remarkably developed during the recent several years and quite a number of people have certainly become well-off.

In thinking about the future of China, we need review how the life and way of thinking of Chinese people changed being affected by the economic growth.

Communist Party and its government seem to have won a victory, in a way, in that they brought about economic development overcoming the crisis by suppressing the students and their followers who demanded the political democratization in Tiananmen Square Incident in 1989.

On the other hand, Communist Party and its government had to inevitably pay heavily for the victory. What was it? It was the loss of centripetal force of the Communist Party ; people became fervently enthusiastic about making money.

As a result, ironically enough, as the economy grew, the new society the revolution built changed itself allowing the survival of such way of thinking, social power and custom inherent to the old regime, while the first revolutionary generation such as Deng Xiaoping, who fought for the new society at the cost of their lives, are ending their days before long.

That, however, appears to be the way history proceeds.

はじめに

中国の近現代史は、日本も含めた外国勢力に踏みにじられた歴史であると同時に、中国人同士の文字通り血で血を洗う抗争の歴史でもある。はじめは理想を掲げて立ち上った改革者も、やがて権力を得ると墮落してしまう。絶対権力は絶対に腐敗するとの例にもれず、中国共産党もこの轍を踏んでいるらしい。’89年に、中国全土で若い人を中心に政治の民主化を求めて異議申し立て

* 教養部

が行なわれたのには、国民党政権の腐敗を叫んで革命を起した共産党が、「国民党政権時代よりも腐敗している」といわれるような昨今の事態になり、人民がそれにがまんしきれなくなったのが根本の原因であり、正当な要求であったにもかかわらず、老いて、すでに直接人民と接する機会もなく、高齢をはばかって、体に障るような情報からも遠ざけられ、人権とか人道主義、民主主義など理解できず、それらをすべて資本主義社会の偽善として排撃してしまう、最高指導者グループへの反逆としか把握されなかったその差が、大きな悲劇を生んだのである。人民を敵視し、人民に銃口を向けた“人民の党”から人心が離れるのは当然であり、それを食い止め、生産力を向上させ、国際的にも中国のイメージダウンを回復していくためには、開放政策を一層押し進め、人民に物質的満足と刺激を与え、不満を吸収していかなければならなかった。だが皮肉なことに経済力の向上は、人々を拝金主義に駆りたて、それが旧社会、旧勢力、旧習慣の復活を許し、経済力の格差の増大は退廃を生み、党に対する信頼をますます失わせている。

今回は、ここ数年来の共産党の腐敗の具体的な例・及び人々がどのように党への信頼と期待を失い、利己主義、拝金主義に走っていったかを描いた作品を取り上げた。

—

憤 怒 の 蒜 薹

莫 言 著 約22万字

この小説は、フラッシュバック手法というのだろうか、ストーリーが時間に沿って描かれていないため要約しにくい、高羊と高馬という二人の農民が遭遇した事件を中心に語られる。

昼食をとりかけていた高羊が村長の呼ぶ声に出ていくと、いきなり兩足を痛打され、気がついた時には手錠をかけられて引き立てられていた。家には長男を生んだばかりの足の不自由な妻、10才になる盲目の娘がいたが、知らせる間もない高羊を引き立てた二人の警官は、高馬の家に向い彼を呼び出すよう命令した。高羊が「高馬、逃げろ」と叫んだために高馬の逮捕に失敗した警官は、父親を追いかけてきた盲目の娘の前で、高羊を袋叩きにした。かくして高羊は、5月28日に県政府で破壊活動を行なった首謀者として、逃げた高馬を除き、高馬の婚約者の母、方四嬢と若い男とともに逮捕された。派出所に着くと、警官達の昼食のじゃまになるからと、三人は道端の木にくくりつけられ、真夏の太陽に照りつけられて息も絶え絶えになった上、走ってきたトラックからはみ出していた鉄材で頭を割られ、若い男はその場で絶命する。

この県は全国有数のにんにくの花茎の産地で目下出荷の最盛期。昨年もかなりの収入を得た農民は今年も張りきって生産し、収入に大きな期待をかけていたが、それを嫉妬した役人達は、勝手にあれやこれやと違法な課税をし、農民からお金をまき上げる。

一方、逃げた高馬は、畑続きの方四叔の娘金菊と昨年からの恋仲になって結婚を申し込んでいるが、金菊の長兄が病身の上、足が悪いので結婚できず、三角婚(A、B、C三家が、それぞれきょうだいを交換し合ってする結婚)の約束を、親が金菊の意向も無視して結んでいるため、高馬と金菊は方四叔、長兄、次兄に半殺しにされる。二人は役所に訴えようとかけ落ちするのだが、役人が方四叔の遠縁の男で、三角婚の仲人でもあるため訴えは握りつぶされ、逆に捕えられて高馬

は殺されかける。そうこうするうち金菊が妊娠し、三角婚は実現不可能になり、高馬は方四叔に「一万元支払ったら金菊をやる」といわれ、今年と来年の収入をあてれば何とかなると懸命に働いていた。

野菜は収穫後保冷倉庫に保管しなければならないため、出荷の車が倉庫を目指して続々集まって来、身動きもできない馬車やトラックの列に、県の役人は、車輻通行税やら環境衛生税やらの名目を作って絶えず回って徴収したあげく、役人達の縁故者の荷だけ倉庫に収納し、もう満杯だといって一般の農民をしめ出してしまう。高羊や高馬もしめ出されてしまった。皆の不安が高まり、騒ぎに巻きこまれるのを心配した高羊は、方四叔と相談してその場を脱出し、山道に迂回したところ、県の役人を乗せた飲酒運転の車が方四叔の荷車に激突し、方四叔は即死。数日後、役人達がわずかなお金で高圧的に事件のもみ消しをはかったため、県政府に抗議に行った方四嬢、高羊、高馬達は、倉庫を閉めてしまった県のやり方に激高した農民が、県政府に押しかけてきた人波にまきこまれる。説明を求める農民の前に、責任者が誰一人姿を現わさないのを怒った農民達は、閉じた門をこじ開け建物になだれこみ、気がつくと、方四嬢達も皆と一緒に物を投げたり火をつけたりしていたのだった。

父が殺され、母は逮捕され、高馬も行方不明になってしまった臨月の金菊は、絶望のあまり高馬の家の門に首を吊って自殺する。「金菊が死んでも一万元は支払え」とか「葬式はお前のところでやれ」など言う非道な金菊の兄達を相手にせず、高馬はきちんと金菊の葬式をし、その場で逮捕された。(留置場でのひどい待遇については省略)

このあとは裁判の場面で、同じ騒動で逮捕された他村の老人の息子で若い軍人が弁護に立つ。その弁論が作者の主張であり、中国人民の主張であると思うので少し引用してみたい。

「实行了分田到戸政策，農民的生産根本无需干部操心。干部們便天天大吃大喝，吃喝的費用当然不需自己掏腰包！説句过火的話，这些干部，是社会主义肌体上的封建寄生虫。所以我認為，被告人高馬高呼‘打倒貧官汚吏！打倒官僚主义！’是農民覺醒的进步表現，并不构成反革命煽動罪！难道貧官汚吏不該打倒!? 难道官僚主义不該反对!?’ (P262 請負い制が行われてから、農民の生産に対し幹部は頭を使わずに済むようになり、幹部達は自分で費用を出さずに、毎日飲み食いに明け暮れている。彼らは社会主義に取りついた封建的な寄生虫だ。被告高馬が「貧官汚吏を打倒しろ、官僚主義を打倒しろ！」と叫ぶのは、農民が目覚め、進歩したあらわれで、決して反革命煽動罪ではない。まさか貧官汚吏は打倒すべきではない、官僚主義に反対してはいけない訳はないでしょう) と、この発言の前に、一々具体的に乱発されている税金の種類と金額をあげ、肥料や農薬の値段の急上昇と課税のため、農民がいかに搾取されているか、農民のがまんの限界に達したからこそ起きた今回の事件は偶発的なものではない、としたうえで官僚の非道を糾弾するのである。そして「我認為，“天堂蒜薹案”為我們党敲响了警钟，一个党，一个政府如果不為人民謀利益，人民就可以推翻它！而且必須推翻它！」(P263 今回の事件は党に対する警鐘である。ある党、ある政府が人民の利益をはからないのならば、人民はそれを覆すことができるし、覆さねばならない)

「一个党的負責干部，一个政府的官員，如果由人民的公仆变成了人民的主人，变成了騎在人民头上的官老爺，人民就有權力打倒他！」(P263 党の責任者，政府の役人が，人民の公僕変じて人民の主人，人民の頭にのしかかる旦那様になってしまったのならば，人民はそれを打倒する権利がある）と言いきり，裁判長は蒼ざめ，体をわななかせ，この青年軍人を煽動者だと決めつけるが，逆に言いまかされ，傍聴人，被告達の熱烈な拍手の中で，休廷をせざるを得ない。

裁判の結果は，県の指導者達が停職になったものの，役人同士のかばい合いで，再教育を受け他の地区に転属になっただけで，農民は根本的には全然救われなかったらしい。

最初の高羊逮捕時からの警官のやり方，高馬と方金菊をめぐる方一家と親戚の役人のやり方など，今なお残る中国の暗部であるが，今回は触れない。

作者は附記に，この物語は全くの虚構で，現実に似たような事件があったとしても，偶然の一致にすぎない。と断わっているが，この小説が最初に発表されたのが'87年，そして'93年に再出版されるとベストセラーになったことは，この小説が虚構であるとか，一農村の問題でなく，中国全体に当てはめられる問題であることを，読者が読みとったからであろう。「共産党変了！現在の共産党跟过去的共産党不一样啦！」(P262 共産党は変質した。いまの共産党は以前の共産党とは違ってしまった！)との被告達の叫びは，人民の心からの叫びであるに違いない。

二

官 人

劉 震雲著 約4万字

ある部（省）で部長（大臣）が変り，袁局長以下7人の副局長に大移動があるという噂が流れ，皆が局長達の命令をなおざりにし始めた。どんな職場も中国の縮図である。局長，副局長更迭の原因は，彼ら8人が常に角つき合い団結できないこと，8人中4人は定年を過ぎたのに居すわっていること。袁局長は新部長から「君は残って自分に協力してほしい。副局長は全員解任する」と言われたのだが，この話はなぜかすぐに一同に伝わって，敵味方入り乱れすさまじい暗闘が始まる。例によって個人攻撃の密告があり，新部長の腹心の部下曲秘書一行が調査に乗りこんでくる。袁局長の疑いは晴れ，曲秘書も「あなたは部長が保証しているのですから，局長のポストは変わりませんよ」といっていたのに，数日後正式発表されたところ，袁局長は閑職に追いやられ，副局長も2人残された以外は解任，新局長は曲（元）秘書，残された2名の副局長も，新局長が新しくつれてきた複数の副局長より席次は下。ここにきてはじめて袁局長は新部長の腹心を局長にするための罠にかかったことを知る。新局長のもとに新しい指導部が発足したが，ほどなく新指導部内の分裂が顕在化する。曲新局長は，上層部へのごきげん伺いで大忙がしである。

中国では，職場で然るべく出世するには，共産青年団から共産黨員にならなければだめなことは，同作者の「単位」や「一地鶏毛」にもくわしい。現在の中国人にとって共産党に入党するのは，単なる手段であって，理想も使命感もなく，庶民の尊敬もない。それどころか入党前と入党後の態度の差から機会主義者と見られている場合もある。官人（役人）に出てくる部長，局長，

副局長は（元秘書も含めて）恐らく全員が共産党員であろうが、していることは尊敬も同情も呼ばない。これまで、社会主義の優越性を叫ぶ時に、職の保証があったが、最近では国営企業であっても、共産党員であっても失業する時代になって、社会主義社会の誇りを支えてきた大きな柱の一つが保証されなくなってきた。これまででも定年が来ても居すわり続けるのは、裏返せば現職でいることが社会生活上どんなに有利であるかを示しているが、定年の前に失職するという、新事態に直面した人は、どのように対処するのか、つぎは国営企業や、完全雇用制の実態とはいかなるものであったのか、その一面を描いた作品である。

三

揺 蕩

王 炬著 約1万9千字

通告は突然だった。その時彼はタイプ室で会議の資料を印刷させながら、タイピストととりとめのない話をしていた。近頃新聞紙上では、鉱山の整理を叫ぶ論説がしばしば発表されていたが、ここ、黒峰山鉄鉱が所属する野鹿鉄鉱公司は資金が豊富であるから関係ない、だから責任者の雲書記から、会議を開くからすぐ集まるよう電話があった時も、その席上でお偉方に配布したい書類を、タイピストを急がせ作製していたのである。彼は大学出たての秘書陸聰は使いものにならないと感じており、重要な文書はすべて自分で起草し、上層部からもその能力を認められていた。例になく12分ほど遅れて出席すると、会議はすでに終わっていた。前代未聞のスピードであった。出席者は全員暗い顔つきである。黒峰山鉄鉱は野鹿鉄鉱公司傘下の白峰山鉄鉱に吸収合併されることになったのである。在職している千余名の職員のうち継続雇用されるのはごく一部で、幹部は一般職員に格下げとか。

こうして事は終わった。黒峰山鉄鉱は見込みより埋蔵量が少なく、ずっと赤字経営だったのである。翌日から何もかも変ってしまった。白峰山から乗りこんできた人間にすべて封鎖され、自動車やタイプなどすぐ使えそうなものは全部接収され、運転手やタイピストは機械の付属品として連れ去られ、台帳にあっても実物が見当たらない細かい道具――ポットの類も、行方を追及された。黒峰山幹部の命令を聞く者はなく、それぞれの血路を開くため欠勤する者が続出した。

雲書記の口ぞえにもかかわらず、彼にもたらされたのは屈辱的なポストで、とても受け入れる気になれない。気位の高い妻がなんというだろう。事務室主任の地位だけで彼と別れずにいる女なのに。休んでいた秘書の陸聰が出てきて、南方にポストを見つけたから、「一緒に行って自分を手伝ってほしい」というが、そういう訳にはいかない。皆は南方南方と目指すけれども。

その日の夕方、雲書記からまた電話があった。野鹿鉄鉱公司は全方位大規模改革に取り組んでいて、白峰山鉄鉱がまずその対象で、今後は競争制を実施するので、君にポストが回ってくる可能性もあるとのこと。電話を持つ手が震えた。待たねばならない。自分も決定的敗者ではないかもしれない。

鉄飯碗としてこれまで潰れることのなかった国営企業が、赤字経営の所はどんどん整理される

ようになってきた。今までにも待業青年という失業者は相当な割合で存在したが、リストラは中国では未曾有の事態である。「揺蕩」(動揺)の“彼”は新しいポストを得られるかもしれないが、得られない人間はどうするか、個人で解決するしかない。すべてを共産党に頼っていれば絶対安心と教育されてきたのが空手形に変わった時、党への信頼が変化するのは当然である。

「21世紀は中国の世紀だ」とアーノルド・トインビー氏は言った。「21世紀には経済力でトップに立つ中国が、世界をリードするであろう」との見解は'93年の世界銀行報告書である。その見解は信じがたい。その説の論拠になっている統計は、香港や台湾を含めてのものであり、21世紀に三者が一つの中国になっているか、香港が中国に返還された後どうなるかが分らないかぎり、あまりにも楽観的展望であると思われる。確かに以前に比べれば生活水準は向上し、購買力も増加している。中国人は勤勉ですぐれた資質を持っているとも思う。しかし基本的な部分で、中国は危険要素もかかえている。政治体制、人々の間の所得格差の増大、増え続ける人口、一向に減らない文盲、教育の軽視、従って人口の割には質の低い労働力、地力の衰弱、予想より少ない地下資源など、食糧もエネルギーも輸入国になりつつある。

揺蕩に描かれている鉱山も、毛沢東時代の如くスローガンだけではやっていけなくなり、その他の国営企業も、破産や統廃合を余儀なくされる昨今の状況である。現在の目から見れば、これまでなんと国家的偽瞞の中に中国の人民は置かれていたのだろう。急に職を失う人には退職一時金、定年退職者には年金もあろうが、年30%ものインフレの中で、生活の安定は保てないし、生活の全手段を「単位」と呼ばれる勤務先に頼ってきた中国の習慣では、その単位が潰れてしまい、再雇用市場にも厳しいものがあるから、失業者の増加は大問題である。失業者ばかりではないが、希望や目標を失った存在の増加は、退廃に結びつく。

つぎの作品は、タクシー運転手の目から見た形で描かれる、最近の北京の世相である。

四

北 京 “面 的” 1818

陳 世旭著 約1万2千字

この短篇は、作者がたまたま乗った面的(乗合タクシー)の運転手が途中で語ったことを、そのまま書きとめた形になっている。いくつかのエピソードごとにまとめる。

①北京の世相と、権力者の不正が語られたあと、一昨日、きわめて無口の同僚が乗客に「今、北京で二つの会議が開かれているのを知っているか、どう考えるか」と問われ、きちんと答えなかったために、その乗客がたまたま地方から上京してきた人民代表(国会議員)で、車のナンバーを会社に通報され、運転手をよく教育しろと会社が批判されたため、あやうくクビになりかけたのを、皆の口添えで助かった話。「お客さん、これが、人民の生活を向上させる代表のすることと思えますか」

②運転手の仕事の難しさ、たとえばタクシー代をごまかされることがあり、その手口の説明。

③国家権力との関係の持ち方。夜中近く帰宅の途中警官に呼び止められ、家と反対の方向に行ってくれと頼まれ、拒否もできず送り届け、代金は後日の事も考え受け取らなかったこと。

④その後、ふとした違反でつかまった時、前記の警官に話を通じると、裏から手を回してくれて事なきを得たが、お礼の外国たばこ代が、罰金よりも高くついたこと。

⑤車内で男女がいかがわしい行為をしたり、若い娘に複数の男がまといつているので、自分の娘を思い浮かべ、男達を降してその娘に注意したが、何の効果もなかったこと。またある日、毆にかかってレイプされかけた娘をうまく助けてやったものの、しばらくは相手の男に襲われなしかと恐怖心を抱いたこと。

⑥てっきり犯罪にまきこまれたと心配したが、自分の思い違いだった時もあれば、空港に向かう途中、急に明りを消して裏道を通るようナイフをつきつけられ、絶対絶命と思った時、パトカーが止って出てきた警官が、たまたまいつぞやの警官で、一命を救われ、その時は警官の顔を見て思わず涙が出たこと。「だから警官とは仲良くしておかねばならない。といった意味がお分りでしょう」「あっ、着きましたよ。このまま中に入るのですか。証明書をお持ちですか、えっ、人民代表でいらっしゃいますか。何か失礼なことを申し上げなかったでしょうね。代金ですって、受けとれませんよ。人民代表に服務するのは人民の義務ですよ。のちのちのためにですって、そんなこといわないで下さいよ」

十数年前までは、タクシーや乗用車に乗ったことのない市民も多勢存在していた北京も、ここ数年生活水準の向上で、タクシーは特殊な人の乗り物ではなくなり、市民の足となっており、紀要19号でとりあげた“公共汽車詠嘆調”では、バスの運転手のあこがれの的だったタクシーの運転手も、現在では危険と同居する、結構つらい仕事になっている。そのつらい稼業で経験したことを乗客に話す、という形でいくつかのエピソードが語られる中で、北京の世相が浮かび上がってくる。運転手の感じている危険は、大別すると二種類ある。その一つは国家権力との間合いのとり方である。中国は人間関係によって法律まで左右されることがあるから、至るところにコネを作っておく必要がある。そのためには警官からタクシー代を受けとらないどころか、交通違反のもみ消し料として罰金よりも高い物品を敢えて贈ったりもする。そのあたりをケチらないのが中国における“正しい暮し方”である。上から下までのこの風潮は、当然腐敗の温床である。もう一つはお金のためならば何でもする人間の増加である。犯罪や売春も増え、昔気質の律気そうな運転手も、そういった現場をしばしば目撃したり、まきこまれたりせざるを得ない。外国からの旅行者もよく狙われる。こうした問題はもちろん中国だけの現象ではないけれども、中国の場合には、やはり政治に民意が反映するまでに時間がかかりすぎる点に、大きな問題があるのではないか。’89年、政治の民主化を請願して青年達が燃えていた頃の北京は、かつてないほど秩序立ち、人々がお互いに優しくなっていたと、*ソールズベリーの有名な高名のジャーナリスト、当時北京に在住していた友人、知人も証言している。人は希望や目的を失った時、墮落するのではないだろうか。そのよい例が、つぎの作品である。 *（ニューエンペラー、福武書店）

五

泯 滅

梁 曉声著 約28万字

父親同士が十代の頃、一緒に郷里の山東省を出て、苦労を重ねたあげく、ハルビンの場末にやっと世帯を構えていたため、私と翟子卿は兄弟のように育った。私の幼時の思い出はすべて彼に結びつく。彼はもう一人の私であった。早く父を亡くした彼の家は一段と貧しくなったが、彼は母を助けてよく働き、学校の成績も抜群で、中学にも数々の栄誉をもたらし、私の勉強もよく見てくれた。彼の志望は作家になることで、二人でよく貸本屋に通い、そこでしばしば出会う少女に、二人とも淡い恋心を抱いたりした。

文化大革命が始まり、貸本屋のおじさんは紅衛兵に吊し上げられて自殺。私と彼も農村に下放させられた。つらい労働の日々、彼はわずかな日当も大切に貯金して母に送金し、大学受験が再開される時に備えひそかに勉強していた。以前貸本屋で出会った娘も下放されてきて、彼に愛を打ち明けるが、彼もその娘を愛しながらも拒絶したために（註 当時は結婚してしまうと農村の戸籍になり、将来都市に戻れない。従って受験もできなくなる）周囲の非難を浴びる。やがて大学入試が再開され、その基準が職場や人民公社など、周囲の労働者や幹部の推せんによると知った時、「試験の成績を基準にすべきだ」と北京に手紙で訴え、当局の怒りを買ひ、労働改造に送られる。

文革が終り、大学を出た私は、作家として少しは人に知られるようになっていた。

一昨年、二十数年ぶりにハルビンに帰郷した時、下放当時の仲間が集まることになり、気が進まなかったが止むなく出席する。その席の賓客は“財閥”と呼ばれる男で、主催者が出席者をつぎつぎ紹介するのを、適当にやりすごしている態であったが、私の名を耳にした彼は、過度の関心を示す。面識のない相手に引き止められて当惑したが、その“財閥”こそ翟子卿であった。彼の家に連れていかれ、彼の母と旧交を暖める。母親は、金もうけに狂奔し、ほとんど家にいない子卿に非常な不満を抱いている。数日後、子卿のるす中に彼の妻から電話があり、母の誕生日なので子卿のかわりに来てほしいと頼まれ、彼に妻がいたこと、あの親孝行の彼が母の誕生日も忘れていたことに驚く。

息子同様に可愛がってくれた人の誕生日を無視できず、訪ねて行って大歓迎され、引き止められるままに長居し、母親が疲れて寝たあとも残って、夫に無視されている美しい妻と、私の作品について話をしているうちに、思わず二人は抱き合ってしまう、その場を、トイレに起きてきた母親に見られ、具合の悪い思いで別れを告げると、子卿の妻は見送りに出てきてそのまま市内の彼女自身の住いへ私を導き、二人は一夜を過ごす。夜明け前に彼女は婚家に戻り、私もメモを残して去る。

私はロシアに近い黒河市に行く。以前のひなびた鎮は現在高層ビルの立ち並ぶ街になっており、河べりで、私が北京から来た作家だと知っている男が近づいてきて、「ロシア将校がミグを売りたいので中央にコネを見つけて欲しい」とつきまとう。断わって市内に戻ってくると、愛人を連れ

た子卿に思わぬ出会いをし、彼らと同じホテルに強引に連れていかれる。商談のためにこの地に滞在している彼は、私に作家をやめて商売をするよう強くすすめる。何事もお金の力には勝てない。そして彼は私を罠にかけ、それを知った私も彼を罠にかける。私達は到底同じ道を進めないとの結論に達する。子卿は狂信的な拝金主義者となっており、女漁りも数知れない。その昔貸本屋で知り合い、下放の時に拒絶した娘、鮑衛紅をもお金の力で自由にしたという。

北京に戻った後、子卿の妻から三通手紙があったきり消息が絶えてしまった。

最後の手紙に“自分は妊娠しており、子供の父親は誰か、夫も姑も知っている。夫は中絶するように言うが、姑は生めと言う。自分も生むつもりだ”とあった。私はハルビンに赴くが、子卿一家は消息不明で、わずかな手がかりを探し回った結果、つぎのような事実が判明した。子卿は詐欺に遭い、財産をかなり減らした。回復を焦るあまり、母や妻の反対を押し切ってドーベルマンの飼育を始めた。生れた仔犬を売りに行っている間に、仔犬を奪われて気が立っている母犬が、子卿の母にとびかかり、姑を救おうととび出してきた妻と、犬達に噛み殺され、内臓まで食い荒されたという。子卿は発狂し、精神病院に収容された。私は病院を訪れ、彼の無惨な姿を見た。看護人は「彼は何も分らない」というが、別れ際、彼の目に涙が光っているのを、私は見たと思った。

この作品の主人公子卿は中国人民、子卿の母は中国の大地を表わしているのではあるまいか。一心に、誠実に働き、母親と励まし合い、かばい合って暮しを支えてきた子卿は、性格も成績もよく、貧しさに負けず、本来ならどんな立派な青年に成長したことか。運命を狂わせたのは（毛沢東の妄想から発動された）文化大革命である。苦しい下放生活中にも将来の大学入学を夢見て、厳しい労働の合い間にも人に隠れて（当時は勉強することは人目を忍ぶ行為であった）勉強し続けた子卿は、ひそかに愛していた娘の気持をも受け入れることができず、人々の非難を招く。そんな折に大学入試が再開され、学力での選抜を望む子卿は党中央に手紙を書くが、インテリが臭老九と呼ばれ、知識があればあるほど腐った人間、学力不足で白紙答案しか提出できなかった張鉄生という男が、真の社会主義的英雄であると、党中央に称賛された愚民政策の時代に、学力重視を要求するのは反革命、国家に反逆する行為と見なされ、労働改造に送られたのである。大学入学の希望も、作家になる夢もあきらめた彼は、幸いにも文革終了後まで生き長らえ、将来の学生生活のため、下放時の日当をすべて母に預けておいたのを元手に商売を始め、二十数年後に「私」と再会した時には「財閥」として人々にもてはやされる人間になっていた。しかし彼の性格は一変しており、お金がすべての拝金主義者として退廃した生活を送っている。彼にとって何よりも大切であった母とも、全く心が通わなくなってしまう。彼の生き方はやがて善なるもの、母と妻を滅ぼし、自分をも滅ぼしてしまう。

この作品は「翟子卿」という題で、'93年に〈当代小説〉第11期に発表され（'93年度の人民文学出版社刊 中篇小説選にも選ばれている）たものに更に手を加え、「泯滅」（消滅）と改題して'94年7月に出版された。紀要第24号に筆者が取り上げた「浮城」と同じ作者のものである。政治に対する表だった批判はないが、作者の主張は鮮明である。勤勉で心やさしい少年を、札東によっ

て触れるものをすべて汚してしまうような人間に変えてしまったのは、共産党の政策の錯誤、というか、上層指導部の権力闘争である。もしこれが現実の人間の身の上にかかった事であるとするならば、文革終了後何年かして、子卿の“前科者”としての経歴は消され、名誉回復はなされたかもしれない。しかし失われた時間は決して帰ってこない。大学を卒業することが、作家になるための絶対条件ではないにしても、中国では大学受験に年齢制限があって、現に無数の子卿が存在するし、文革時に青少年時代を過ごした人々は、中国ではロストジェネレーションに位置づけられている。40代を中心とするこの年代に属する人々は、物心つくや否や紅衛兵としてもてはやされ、利用され、捨てられた経験から、'89年天安門事件の際もきわめて慎重であった由、社会の中心をなすべき壮年層が政治に距離を置き、政治の民主化を請願した青年は、自国の軍隊の戦車に押し潰され、現政権に絶望した。こうした政府のやり方が、人民の不満を招いたのをそらすためにも押し進めざるを得なかった開放政策と相まって、利己主義、拝金主義、海外脱出ブームとなって現われているのである。多くの子卿が、“母”を殺さないまでも、“母”に背を向けてしまったのが現在の中国の姿であろうか。

おわりに

社会主義中国では、聖人の位置にあるマルクスやレーニン、皇帝の役割を果たした毛沢東と鄧小平は、先を見通す力が、当然一般人よりもすぐれていたが、所詮時代の制約を越えられなかったのはしかたがない。時代、科学、技術などの進歩は、思想や哲学も変えていく。自分の生きている時代には予想もつかなかった事が、死後に発生するのは避けられない。生前どのように巨大な権力を有していた人も、後世までは規定できない。

鄧小平の生命の時間を考え、中国は今後どうなっていくのかを問われることがある。誰にも確答のしようのないことだが、予想できるのはまず第一に、中国が多くの問題を抱え、危険な要素も持っているのは事実であるが、当面に限れば人々は変動を望んではいない。10年前、20年前に比べれば、格段の物質的豊かさを享受できるようになった現在、大部分の人の望みは安定である。第二は、だからといって、人々が現政権を信頼し支持しているとは限らない。少なくとも人類の採用すべき唯一絶対の体制であるなどと思いこむ時代は、もう戻らない。経済的に豊かになり、生活に余裕ができるほど、世界の情報も得やすくなり、中国人自身が世界の中の一つのパートとしての中国を自覚し、多様化していこう。政府や党のトップに意見の差が生じることもあるかもしれないが、逆に政治体制をコントロールできるように人民が成熟していくことを、無政府状態を招来するよりも、中国人自身が望んでいるはずだ。

かつて、大学時代に学業を捨てて延安に行った党の長老に、筆者は問うたことがある。「あなた方の目指した革命は、成就したとお考えですか」と。しばし黙考の後彼はこう答えた。「私達は大きな実験をしたのだと思います」その言葉が、今なお私の心に深く残っている。そうなのかもしれない。実験が成功だったかどうか、歴史がすべてを明らかにしていこう。実験はまだすべて終わった訳ではないのだから。

完

引 用 作 品

1) 憤怒的蒜薹	莫 言	北京師範大学出版社	1993年12月第1版
2) 官 人	劉震雲	華芸出版社	1992年5月第1版
3) 搖 蕩	王 炬	人民文学出版社	1994年12月第1版
4) 北京“面的”1818	陳世旭	93年短篇小說選	1994年12月第1版
5) 泯 滅	梁曉声	春風文芸出版社	1994年7月第1版

(平成7年10月26日)